

AMCoR

Asahikawa Medical University Repository <http://amcor.asahikawa-med.ac.jp/>

看護研究集録(2019.7) 平成30年度:96-97.

WOC外来の展望 病院と地域を結ぶ外来の機能を考える地方の大学病院の外来拡充の取り組みと課題

日野岡 蘭子

シンポジウム2 WOC外来の展望 病院と地域を結ぶ外来の機能を考える 地方の大学病院の外来拡充の取り組みと課題

旭川医科大学病院 日野岡蘭子

はじめに

看護師が主体で運営する外来は、診療報酬に関連する様々な加算に伴い、認定看護師の増加とともに全国の医療施設で行われている。患者の視点で生活を見る看護師が外来で生活指導、ケア指導や様々な職種との調整を行うことで、入院期間の短縮などの成果として実証されている。反面、都市部と地方、大学病院と地域支援病院などでは抱える課題も異なり、情報共有の在り方によっては共通の視点を持つことが難しい場合も少なくない。演者の所属する地方の大学病院での外来拡充における取組と課題について報告し、ことなる背景を持つ施設との問題の共有ができれば良いと考える。

背景

広大と言われる北海道は、面積が約83457km²。この中に11の都府県が入る大きさである。人口は約500万人だが、その半分弱が札幌市とその近接部に居住し、日本の縮図とも言える一極集中の状態である。さらに2015年の調査において、全179市町村のうち訪問看護ステーション未設置自治体は100に上る。医学部を持つ大学は3校、2校が札幌市、1校が旭川である。旭川医科大学のカバー地域は半径約250km、遠方からドクターヘリ、メディカルジェット等で患者が搬送されることも多い。治療、リハビリである程度回復後、考慮すべきは地元での生活である。診療科によっては当院での外来フォローも多く、遠方の患者は外来受診のために前泊する。当院の看護外来は、頻回な来院が困難で診療科の診察日に合わせざるを得ない中で、毎日随時対応を基本として実施してきた。課題となってきたのは、看護師主体の外来創傷マネジメントの在り方である。地域で生活することで外来の重要性が高まっているが、医師の外来は治療が中心で生活の管理まで至らないことを感じていた。看護師の専門外来は生活を見るのが主となり、専門的なケアの提供と地域との情報共有が重要となるため、看護師主体の外来で何を重視するのか、会場とともに考える機会とした。

取り組みと課題

当院では複数の看護師がそれぞれの専門性を生かした外来を展開しており、創傷、ストーマやフットケア、弾性ストッキング外来、乳房外来等、認定看護師の資格に関わらず看護師の外来を統括して看護外来としている。その中で従来の医師の診察に合わせて創傷処置時のみ介入する方法から、週1回血管外科外来で創を持つ患者を集約させ、退院時指導の遵守状況、創管理、セルフケアの状態を確認し、退院時では把握しきれなかった自宅での状況や家族の介護状態を詳しく確認し、修正していくことを開始した。また、足趾や下肢の潰瘍で皮膚科を受診した患者を、外来看護師から情報提供を受け、皮膚科医に依頼しABIを測定、午後に患者一覧を確認し、必要に応じて血管外科への紹介を行っている。これにより得られるアウトカムは、重症化予防および退院時期を早めることである。外来は短時間の関わりであることも事実だが、短時間だからこそ計画的な介入を行うことで効果を出せると考える。課題は外来看護師の役割明確化と外来受診困難な在宅患者のための地域との情報共有である。外来看護師はスクリーニングの役割を担い、専門的知識・技術をもつ看護師に必要なことを依頼する。看護師が行う外来の拡充には、外来看護師の果たす役割が大きい。同時に患者の利便性を共通のキーワードに、院内のシステムを変えていく対話力と調整力が期待されるものと考えている。今後の展望の上でもう一つのキーワードとなるのが遠隔医療である。医師の利用する遠隔利用ネットワークの構想が看護師でも可能にすることが必要である。専門性を持った看護師の持つ知識は資源であり、その知識、技術は院内外で提供していくものであると考える。自治体の半数以上が訪問看護ステーションを持たず、直近のステーションまで30kmという場所もある北海道の中で、安心して在宅での生活を送るために、WOCの遠隔ネットワーク構築を今後の展望としたい。

まとめ

シンポジウムでは、地方の大学病院の他、都市部の大学病院、地域の支援病院、また外来運営を実際に行うWOCナースを管理する看護管理者の其々の立場から意見交換を行った。立場も背景も異なる演者の中で共通していることは、より効果的な運営のために必要な調整力と地域との関係構築のためのコミュニケーション力である。顔の見える関係のためには組織の中で待っているだけではなく、積極的に向かうことが必要であることを共通見解として再認識した。参加者も含めて其々が抱える問題点を明らかにすること、それらを解決するために自身が何をするのか、誰と情報共有をするか、どこと協働するか、考える機会となったのであれば幸いである。

個々の発表に対して会場との具体的な検討はなかったが、外来運営を主体で考えていくには、他職種、特に診療科医師との調整が重要な位置を占めることが改めて強調された。診療の補助は、医師の指示によって業務を遂行することのみではなく、診療の補助の枠内で看護師が主体的に取り組むことが、患者中心の外来運営に関与すると考える。地域を結ぶ看護師のネットワーク構想に関しては、ディスカッションの時間がとれず、結論が出ないまま終了したが、これらを課題とし今後につなげていきたいと考える。